流星のロックマン《二百年後の訪問者》

白羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン《二百年後の訪問者》

【Ｎコード】
Ｎ９６８６Ｈ

【作者名】
白羽

【あらすじ】
たくさんの危機を乗り越えた星河スバル。しばらくは平和な毎日が続いていたが、新しい危機がすぐ傍に迫っていることを知るものは１人も居なかった。

プロローグ：宇宙からの訪問者：（前書き）

始めまして、白羽と言います。

ロックマンシリーズは好きで、流星は全てやりました。エグゼは3、４しかやった事がないので、その辺を使いたいと思います。

感想や質問もどしどし送ってください！！番外を作って答えたいと思います。

では、始めます。

プロローグ：宇宙からの訪問者：

「時は再び動き出す。」

「二百年前に地球を訪れたときはロックマンに光熱斗がいた。彼らは私に信じる事を教えてくれた。２人は私の恩人だ……」

宇宙空間のコスモウェーブで巨大な電波体が言った。

「ですが……様。再び悪の芽が生えました。ディーラーという組織が現れたらしいです。」

「しかし《流星のロックマン》と呼ばれる者が全て……まあ五度だが、危機を救い、悪を薙ぎ倒したらしいです。」

「ならば裁きは《流星のロックマン》が対象に？」

「いや、ダメだ。流星のロックマンには手を出すな。これは……様の意志だ。」

「他の者か？」

「いや、流星のロックマンも他人も関係ない。地球全体に判決を下す。」

「やはり不意討ちを？」

「だめだ。それは……様が認めん。ですよね？」

「不意討ちは一切認めん。でないと彼ら……光熱斗とロックマンに顔向けできないからな。」

「了解いたしました。……最初は誰が行く？」

「俺が序章だ。」

「分かった。しっかり見定めて来い。……くれぐれも気を付けてな……ファイ。」

ファイと呼ばれた電波体はコスモウェーブに消えた……

始まりの朝（前書き）

感想第一号貰いました！！
ございます！！

ありがとうご

始まりの朝

「朝だな。」

身体を起こして辺りを見回す少年《星河スバル》
彼は相棒であるウォーロックと合体（電波変換）して地球のヒーロー《ロックマン》へと変身できる。
過去にはＦＭ星人の地球征服や古代文明ムーの悪用、流星メテオＧの脅威などが有名だが、事実上、アポロンやシリウスとの戦いも含めて計五度の危機を乗り越えている。

「お前が早起きとは珍しいなスバル。」

「ウォーロックおはよう。別にいいだろ。」

スバルはリビングに降りた。

「おはよう。父さん、母さん。」

「おっ、早いなスバル。」
「おはようスバル。さ、今日から新学期でしょ？早く準備して早く行きなさい。」

今言ったのはスバルの両親の星河大吾に星河あかね。大吾は過去にスバルの活躍によって流星メテオGから無事帰還した。

「ご馳走様。じゃあ行ってきます！！」

「はい。行ってらっしゃい。」

スバルは勢いよく家を飛び出した。

「早く出かけるのも悪くないね。」

「だな。ゆっくりできて最高だぜ。」

スバルとウォーロックはゆっくりと歩いている。公園……ＢＩＧＷＡＶＥ……友達の家に学校。スバルの守った景色は本人にも感動を与えてくれる。

「……校門が閉まってる……」

「朝から気落ちしたな…」

早く学校に着いたのはいいが開いていない。

「しょうがない、展望台にい

「お、星河、早いな。」

「おはようございます。育田先生。」

出てきたのはスバルの担任育田道徳。過去にリブラに操られたが、スバルに救われた人だ。

「いま開けるからな。」

「はーい。」

スバルは学校に入る事ができた。その頃……

「さて、まずは流星のロックマンに会うとするか。」

ファイが……いや、危機が迫っていた。

接近！スバルとファイ１（前書き）

今日２話目の投稿です！！

接近！スバルとファイ1

「あら、今日は早いのね」

登場したのは白金ルナ。

かなりのお嬢様でスバルも手を焼いている。

「おーっす！！スバル。」

次は牛島ゴンタ。ＦＭ星人のオックスと電波変換して、オックスファイアに変身できる。

「おはようございます。スバル君」

最小院キザマロ。小さいが知識人で知らない事はない……のかなぁ

３人揃って委員長軍団！！

……スミマセン、めっちゃふざけてました。

「おはよう。みんな。」

笑顔で挨拶を返すスバル。

「……あれ？ジャックは？」

ジャックとは元ディーラーの幹部で、スバルと敵対していたが、今ではすっかり親友だ。

「暁さんに呼ばれてＷＡＸＡに行ったわ。」

暁さんとは、ディーラーの幹部だったジョーカーとの戦いで、ほぼ致死量のダメージを受けたのに、何故か復活した悪魔超人（嘘？）だ。

因みに本名は暁シドウ。

この頃ファイはと言うと……

「迷ったあああぁぁぁぁぁ！！どっちがどっちなんだあああぁぁぁぁぁ！！」

どこかの密林で迷子になっていた。（コダマ小学校の近くの林）

「……？」

「どうしたんですか？スバル君。」

「いや、誰かに呼ばれたような気が……」

「スバル君の空耳じゃないんですか？」

「うーん……やっぱり空耳かなぁ？」

「自意識過剰ってやつか？」

「違うと思うよ。でも呼ばれたような気が……」

実は気付きかけてたスバルなのでした。

接近！スバルとファイ2～前編～（前書き）

いきなり凄い事になりそうです。

接近！スバルとファイ2～前編～

「白金！挨拶を頼む。」

「はい！さようなら！」

「「「さようなら」」」

この日の学校はルナの挨拶で終わった。

「やっと見つけた。星河スバル……いや流星のロックマン……」

「！！スバル！屋上にとんでもなく強い電波体の反応がある！今すぐ電波変換して屋上に向かえ！！」

ファイの気配に気付いたウォーロックがスバルに叫ぶ。

「う、うん！―トランスコード・シューティングスター・ロックマン―」

「来たか、ロックマン。」

「お前は何者だ！！」

「俺の事か？」

「そうだ！！」

「でわ教えてやろう。」

ファイは
「ふふふ」と笑いながらロックマンに身体を向ける

「貴様、二百年前に小惑星が地球に向かって来た事件を知っているか？」

「知ってるよ。」

「その事件は我が主が起こした事件だ。」

「！！！」

スバルが構える。

「そう強ばるな。まだ続きがある……」

ファイは話を続けた。

「しかし、それには理由がある……何か分かるか？」

スバルは首を振るだけ。

「なら教えてやろう……」

「……地球上に存在する《悪》を抹消するためだ。」

「……だが、二百年前のロックマンによってそしされた。」

「それは知ってる。それより悪を抹消するためってどういう事？」

「二百年前には沢山の悪がはびこっていた。そして放っておけば宇宙が危ないと考えた我が主は地球上の生物を抹消する事にした。」

「今はちがう！！」

「知っている。短気は損気と言うだろう。」

「……」

「主は教えられた。仲間を信じる絆の強さを光熱斗、ロックマンによって……」

「……そして今度は今の光熱斗とロックマンが作った世界に悪が生まれた。……ここからは分かるな？」

スバルは無言で頷く。

「……ならば始めよう。地球……いや、絆を賭けた大切な者を守る戦いを……」

接近！スバルとファイ2～後編～（前書き）

キャラがぶっ壊れてます。

接近！スバルとファイ2～後編～

「……1ついい？」

「なんだ？」

「戦いをするって言うのは殺し合いって事？」

「違うな……殺しは一切無しの真っ向勝負。来週の火曜日から毎日宇宙空間のコスモウェーブに来い。」

「……分かった。」

「もう一つ、この事は言おうが言うまいが、自由だが、大切な者を守りたいならば他言無用だ。」

「……」

「心配そうな顔をするな。裁きの審判を防ぐには我ら5等戦士に勝ち、我らの主に勝利する必要がある。」

「5等戦士？」

「ああ、俺（ファイ）に続き《レイ》《アル》《エスク》《ルア》だ。」

「強いんだよね？」

「ああ、俺が4番手。つまり2番目に強い。最強は《ルア》だ。」

「分かった。……僕は絶対に勝つ！！」

「いい返事だ。またな。」

「じゃあね。」

ファイは飛びさっ……

「……なあ。西ってどっち？」

ずしゃあぁ！！

「あっちだよ。」

「おお！またな！！」

「……なんだったんだろ？」

「……さあな。」

ファイの方向音痴に呆れるスバルだった。

～コスモウェーブ～

「ただいま戻りました……様。」

「ご苦労だったなファイ。」

「はっ。ではこれで。」

「うむ。」

「よぉ、ファイ。」

「なんだ？アル。」

「いや、なかなか帰って来なかったから、まさかとは思うが……」

「ＹＥＳ！迷子になってた」

「このバカ……」

アルはスバル達のように呆れ果てていた。

「楽しみだな、光熱斗、ロックマンよ……」

巨大な電波体がうっすら笑った。

準備期間？１（前書き）

えっと、設定については番外を作ります。以上！！

準備期間？1

〜〜ファイが消えた屋上では〜〜〜

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

スバルが胸を抑えて苦しんでいた。

「おい！！スバル！！」

「はぁ……凄い……プ…レッシャーだっ……た。しゃべったりするのが精一杯で……攻撃してたら負けてた……」

仰向けに倒れてスバルが言う。ファイのプレッシャーはアポロンやシリウスを遥かに凌駕していた。

ファイは黒いマントをはおっていて、顔は分からなかったが、目を見ただけで氷づいてしまいそうだった。

「だが、お前が諦めたら全部同じだろう。」

「うん……僕は負けたくない……絶対勝ってみんなを守るんだ！！」

～コスモウェーブ～

「まさか俺の本気の殺気を浴びて耐えるなんて……ふっ……ますます楽しみだな……」

ファイが不敵に笑った。

「あ！ルア！俺の部屋ってどこだっけ？」

「この……馬鹿がああああああ！！」

「ぎゃぁぁぁぁ！！！」

しばらくの間ルアにフルボッコされたファイなのでした。

「いつまでたっても馬鹿なんだから……ねえ、アリアス。」

「だよねぇ《エスク》」

何かモニターのような物を見ながら呟くのは1人の人に、エスクと呼ばれる電波体。

電波体は青いマントをはおっていて、ファイ同様に目しか見えない。

人も同じでしっかりかぶったローブからは透き通った目が見える。

名前はアリアスらしい。

「口調がずれてるよ。アリアス。」

「済まない。エスク。じゃあ行こうか。」

「うん、準備もしっかりしようね。」

「「この僕(エスク・フィランス)が相手だよ《流星のロックマン》！！」」

人と電波体は笑いながら闇に消えた。

準備期間？2（前書き）

スミマセン、めちゃくちゃになりかけてます。

まぁその辺はいろんな敵がいるって事で（笑）

準備期間？2

～スバル宅～

「ただいま。」

スバルは家に入り、ベッドに寝転んだ。

「スバル……どうする？」

「正々堂々と勝負する。そして今の世界を認めてもらう。それだけだよ、ウォーロック。」

「お前らしいな。だが、暁やジャックぐれぇになら話していいだろ。」

ウォーロックはスバルが本気で心配らしい。長年コンビを組んだからなのか、本人しか知らない。

「うん。言うなら父さんにもだよ。」

スバルはウォーロックと目をあわせて笑った。

「明日から…特訓だね。」

「だな。負けらんねぇ。」

この日は終わる……

～某国某所～

「ねえ、エスク。星河スバル君やウォーロックについての情報は集まった？」

アリアスは暇な様子。

「うん。見せるね？」

（う～っ、まずいよ調べて分かったけど星河スバル君って超イケメンだから……）

「きゃぁぁぁぁ！」バタッ

（やっぱりこうなった……しかも……）

「ビデオもあ

「見る！！」

光の速さでエスクからビデオを奪うと再生した。

「僕が……守るから…」

「……」↑気絶中

（まさか、性格、顔、髪や目の色、声色、全てにおいてアリアスを直球ど真ん中で射ぬくなんて……ただ者じゃないね……）

アリアスは実は女の子らしい。しかもスバルに一目惚れ。

「決めた！！勝ったらスバル君に告白する！！」

（なにいいい！？）

ある意味最強の難敵の予感がするアリアスだった。

「へっくしょん！！！」

（なんだろう？かなりの悪寒を感じる……）

スバルは生気に当てられていた。

準備期間？3（前書き）

アリアスが暴走気味です。

準備期間？3

～WAXA～

スバルは暁に頼んで召集したサテラポリス遊撃隊に、裁きの事や、自分はどうしたいかなどを伝えた。

「分かった。俺等はスバルに任せる。だがな？頼る時はしっかり頼ってくれ。スバルは大事な仲間なんだから。」

「……はい！暁さん。」

「よし、そうと決まればパワーアップデータを作るか！！」

「えぇ、行くわよ。大吾ちゃん、天地ちゃん。」

スバルの恩師ヨイリー博士は大吾とその後輩の天地を連れていった。

「……」

ここで膨れっ面をしてるのだーれだ？

分かった方は感想、評価、もしくはメッセージをよろしく！

では場面転換……キュー！

～某国某所～

「好きです！！付き合ってください！！」

バトルとは何も関係ない《告白》という人生最大？のイベントのもう特訓中のアリアス。

「だめじゃないの。バトルの練習しなきゃ。勝てなきゃ告白も何も無いんだよ？」

ピタッ↑緊急停止

「バトルの練習から頑張る！！」

アリアスは直ぐに切り替えてバトルの練習をはじめた。

「私たちは負けないわよ。流星さん。でもね？アリアスとアリアスが恋した星河スバル君だけは守ってあげるから……」

こちらでも、バトルと無関係の願いを持つ電波体がいた。

まぁ、みんなが平和を願っているってことにします。

【形はどうあれ、自分の信じる物を守るのが、平和であり、信念で

あり、そして願いでもある。】

それが彼らの主の教えであり、大切な物だ。

準備期間？3（後書き）

質問の答えはメッセージに入れるか、感想、評価にお願いします。

大切な人（前書き）

そろそろスバルのパワーアップを考えようかな？

大切な人

「……」

スバルの

「戦いをする」の一言で不機嫌になった少女が1人。

分かった方が多いと思うが、この少女は国民的アイドルにしてスバルの初めてのブラザー《響ミソラ》だ。

「スバル君……」

「なに？ミソラちゃん。」

「今から少しだけいい？」

「うん。ここじゃなんだからコダマタウンの展望台に行こうか。」

～展望台～

「ミソラちゃん、いつもの元気はどうしたの？」

ウェーブライナーでも喋らなかったミソラにスバルが聞いた。

「スバル君。絶対に生きて帰って来て……スバル君が居なくなったら私……グスッ」

「大丈夫。僕は絶対に戻ってくるから。」

そういってミソラを抱き締めた。

「……スバル君。好きです。」

抱き締め返しながらミソラがささやいた。

「僕もだよ。好きです。付き合ってください。」

2人は暫く抱き合っていた。

～コスモウェーブ～

「あと6日もあるのか…」

「暇だね。」

「うん。」

と受け答えするアリアスだったが、頭の中は

（スバル君スバル君スバル君スバル君スバル君スバル君スバル君スバル君）

という状況に陥っていた。

（なんでアリアスの後ろにどす黒いオーラが見えるのかな？）

それを見たエスクは冷や汗を流していた。

新しい力（前書き）

スバルの新しい力は3のある物にオリジナルを混ぜてみました。

新しい力

「……で、何か用？」

金曜日、スバルば大吾に呼ばれてＷＡＸＡを訪れた。

理由はロックマンのパワーアッププログラムが完成したからしい。

「ああ、まずはこれをハンターに組み込んでくれ。」

渡されたのはマークの入ったアダプタで、《ＲＯＣＫＭＡＮ　ＥＸＥ》と書かれていた。

「ロックマンエグゼって言うと二百年前のロックマンだよね？」

「そうだ。これは二百年前に存在した《究極プログラム》を改造して作った物だ。」

「どうやって使うの？」

当たり前の疑問。

「簡単に言えばシューティングスターロックマンに変身した時に左腕にモニターが付いてるだろ？
そこで《究極プログラム》を作動させるんだ。」

「へぇ～っ。」

「試してみるか？」

大吾の提案で、ジャックと戦うことに……

「ペインヘルフレイム！」

「うわあああああ！！」

なったんだけど、データの要領が大きくてロードに時間がかかり、
さっきから逃げてばかりだ。

「どうしたスバル！！」

「ちょっと待ってよ！！いつまでたってもダウンロード終わんなくて戦えないって！」

必死に抵抗するスバル。

「関係ねぇ！！」

「あひゃあああ！？」

――ピピッ――究極プログラムのダウンロードを確認しました。《ライトプログラム》起動――

ジャックの攻撃がぶつかる直前にようやくダウンロードが完了した。

「やっとか……いくよ！ロック！」

「おっしゃあ！！」

「スタイルチェンジ！！」

――ロックマン《ランサースタイル》起動――

スバルの新しい力2

光がスバルを包んだ。

「力が湧いてくる……」

「すげえ……」

光が消えると、騎士のような鎧を着たロックマンがたっていた。

左手には巨大な槍、そして右手には盾が握られていた。

「センコウトツ！！」

ロックマンが槍を突き出すと、光の槍がジャックをちょく撃した。

「ぐあっ！！見かけに寄らず遠距離もあるのかよ！！」

「はあああっ！！」

ズドン！！と音を立てて、ジャックに突進した。

「あ……がっ……」

たった一撃でジャックは気絶したらしく、電波変換を解いて倒れた。

「じ、ジャック！！大丈夫？」

あわててスバルが駆け寄って状態をみる。

「……は、反則だろ。槍で遠距離攻撃出来て、俺よりずっと早いなんて…」

ジャックは無事らしく、直ぐに立ち上がった。

「ありがとう。ジャック。」

「気にすんな。またやろうぜ。」

そういってジャックはトレーニングルームをでた。

「ふんふふんふーん。」

鼻歌を歌いながら二日後の戦いに備えるアリアス。

「何で花束が……」

アリアスが花束の手入れをしているのをみて、エスクが聞いた。

「もっちろん勝ったらここを私とスバル君の愛の巣に……」

（何考えてんだか……）

半ばあきれ気味のエスクだった。

この頃のスバルが再び悪寒を感じたのは、秘密だったりする。

スバルの新しい力２（後書き）

かなり疲れた（ただの寝不足）

戦いの始まり（前書き）

短いです。

戦いの始まり

決戦1日目の朝、スバルは展望台の電波、宇宙空間につながるウェーブホールの前に着いた。

「いくよ、ウォーロック。」

「ああ。」

2人はウェーブホールに入った。

「……来たな。《流星のロックマン》よ。」

声と共に現われたローブを被った5人（体？）と、更に1人、青いローブを被った人がいた。

「始めの相手は僕だよ。」

青いローブの人が喋る。

「クスッ…久しぶりだね、ウォーロック。」

ローブを取ったのは、真ん中の電波体。エスクだった。

「てめぇは《神霊》のエスクか！？」

「あれ？知り合い？」

ウォーロックの反応にスバルが聞く。

「ああ。ＡＭ星人の生き残りの１人で、３賢者を越える電波体だ。昔に何度か世話になった。」

「へぇ。」

「……消息が掴めなかったから死んだと思ってたが、まさかこいつらの仲間になっていたとはな……」

「それを言うなら君もだろ？地球人の見方なんて。」

「あ？関係ねぇな。ってかお前こそ地球人を味方に付けたじゃねぇか。」

「え！？じゃああの人（スバルはアリアスを女とは知りません）とエスクさんが相手？」

スバルが不安げに聞く。

「違うよ。僕とエスクは2人で1人。ここまで言えば分かるよね？」

「……うん」

「なら行くよ！エスク。」

「ええ。」

――電波変換!!アリアス・オン・エア!!――

VSエスク・フィランス1（前書き）

やっと戦闘に入りました。描写不安なんで、アドバイスをよろしくお願いします！

VSエスク・フィランス1

「…き、綺麗……」

美しい羽を持った電波体にスバルは目を奪われた。

「そんな……綺麗なんて…うふふふふふ。」

（（嫌な感じが……））

スバルとウォーロックは悪寒を覚えた。

「いっくよぉ出てきて！！《ホーリーランス》」

出てきたのは、細身の槍。

（あっちも槍使いか！まずは様子見……）

「ブレイクランス！！」

いきなり現われたエスク・フィランスは鋭い突きを繰り出した。

「バリア！！」

「甘いよ！！」

バリン！！

「バリアが……うあああっ！？」

「細身の槍だからって油断は禁物だよ？」

（つ、強い！！）

「ブレイクサーベル！！」

「ブレイクランス！！」

2人の攻撃が入り交じっていく。

「いやー、やっぱり強いなあ流星のロックマンは。」

「まだ力を隠してるみたいだがな。」

「「……」」

ファイとルアが話をして、
「力を隠してる」に反応し会話に耳を傾ける2人。

「おっそーい！！」

「うわっ！！」

今は防戦一方のスバル。

（仕方ない。まだ使いたくなかったけど……）

「行くよ！ウォーロック！」

「よっしゃ！！」

「本番はここからだ！」

――スタイルチェンジ――――――ロックマンランサースタイル――

「「「「「！！」」」」」

5人はロックマンの体が変化したことに驚いていた。

「……勝負は……ここからだ！！」

VSエスク・フィランス2（前書き）

そろそろ何でアリアスが敵にいるのかを書きたいなぁ

VSエスク・フィランス2

「くうっ！変身して強くなるなんて反則！！」

エスク・フィランスは抵抗しながら距離を取る。

「槍同士の戦いなら負けない！《センコウトツ》！」

光の槍が唸りをあげてエスク・フィランスを襲う。

「きゃっ！！」

（き、きゃっ！？……ってまさかこの人……）

スバルは何かに気付き、エスク・フィランスに寄って行った。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫に決まってるだろ！！君は敵に情けをかけるのか！！」

「だって君は……女の子でしょ？」

スバルが気付いたのはアリアスの性別だった。

「そうだよ！！私の性別は女の子だよ。でも敵は敵！情けは無用だってば！」

戦う姿勢を崩さないアリアス。

「さあ！早く戦うよ！！勝負はこれからだよ！」

「戦う前に聞くけど、いい？」

「……なに？」

「君は……

人を傷つけて、正しい事をしたと思ってる？」

「うっ……」

スバルの一言はアリアスを悩ませた。理由はたった１つ。自分のした事に自信を持って
「うん」と返せないから。実際、仲間になったのが半年前だった（エスクにスカウトされた）とはいえ、今は人類を滅ぼそうとしたのだから、当然と言えば当然になる。

「本当に人を滅ぼそうとするのが正しいと思う？」

「……いよ。」

「？」

「正しいとは思ってないよ！でも、私はしなきゃならない復讐がある！私を捨てた親に復讐しなきゃ……」

アリアスの頭の中にはある光景が再生されていた……

アリアスの過去

～ほんの４年前～

「ちっ……邪魔で邪魔で仕方ねぇな。」

「どうしたの？パパ。」

「黙ってろ！てめぇなんか消えりゃいいんだよ！」

私は驚いた。ほんの数日前までは優しくて、自分を守ってくれたパパが豹変したことに。

理由はママとの喧嘩。挙げ句の果てに暴力にまで発展した。

「グスッ……グスッ……」

「いつまでも泣いてんじゃないわよ！！うっとうしい！！」

ママもママで、言葉の暴力で抵抗する。

そして、いつも八つ当たりの相手になるのは私。

イヤというほど殴られ蹴られた。

そして八つ当たりを終えると決まって。

「「お前なんか生まれなければ良かった。」」

と精神的に追い詰める。

2人の喧嘩の原因は私が生まれて、甘えすぎたから。などといって再び殴られる。

全身にはあざができ、精神力は既に限界だった。

そんなある日……

「二度と帰ってくるな。」

「さっさと消えなさい。」

そういわれ、孤児院に預けられた。

その時の私の中には、親に対する恨みや、怒りしかなかった。

そして、３年たったある日にエスクに出会った。
エスクに裁きのことを聞いた私は親に恨みを晴らすため、あの人達に協力する事にしたの。

私を捨てた親に復讐するために……

VSエスク・フィランス3（前書き）

遂にエスク・フィランス決着です。

VSエスク・フィランス3

「だめだよ……」

スバルはアリアス（エスク・フィランス）の肩を掴んだ。
ミソラや委員長に知られたらどうなることか……不謹慎ですみません。

「……グスッ…」

アリアスは、フラッシュバック（記憶が脳内で再生されて、過去に行った気分になる症状。走馬灯によく似ている）したせいで目から涙が溢れている。

「復讐なんて考えちゃだめだよ……」

スバルが優しく語り掛ける。

「でも……私は……」

「復讐は新しい復讐しか残さないよ。一度嫌な経験をしたからって諦めたらおしまい。だから今は前を見て新しい幸せを作って行かなきゃだめだよ。」

「「「「グスッ……」」」」

地球制裁のメンバー全員号泣中（ってか、こいつら本当に敵か？）

「うん……復讐はやめるよ。」

「良かっ

「でも、戦うことはやめないよ！！」

（えええ！？）

「なっ、何で？」

「楽しいから！！」

エスク・フィランスは再びロックマンに襲い掛かる。

「うわっ！」

ロックマンも戦闘体制に入った。

しかし。この勝負はあっさりと終わる事になる。

「うおおおお！！ＳＦＢ（スタイル・フォース・ビックバン）《ギガ・ブレイカー》！！」

巨大な槍が一閃し、エスク・フィランスを掠める。

「えっ……きゃあああ！」

掠めただけなのにエスク・フィランスは吹っ飛んだ。

（ダメ！ぶつかる！！）

エスク・フィランスの後ろには壁があり、ぶつかったら間違いなく重症をおうであろう程、固かった。

ドンッ！！！！！

（え？）

エスク・フィランスの体に衝撃が走る。しかし、壁に直撃したのとは別の衝撃だった。

「…ったぁ……大丈夫？」

そう。先ほどの衝撃は……

……スバルに抱き止められた事による衝撃だった。

VSエスク・フィランス～終章～（前書き）

遂にやっちゃいます！！

VSエスク・フィランス～終章～

「…す……スバル君？」

今の状況を説明しよう。

前回の話の終わりにスバルがエスク・フィランスを受け止めた。そこまではその通り。そしていまは……

……密着してます。はい。ミソラがみたら爆発間違いなしだろう。

「……うぇあっ！！ご、ごめんなさい！！」

光速で離れるスバル。

「……うん。大丈夫だよ」

「若いねぇ」

「だな。」

（（お気楽過ぎだろ。あんたら本当に敵か？））

「僕の勝ちだね。」

「うん。しかた……な……グスッ……」

「な、何で泣いてるの！？もしかして何かした？ご、ごめん！！」

テンパるスバル。

「大丈夫……ただ、……出来なかったから……」

「？どうしたの？」

「ううん。なんでもないよ。」

「何かあるなら力になってあげるよ。ほら、言ってみて。」

「……うん。わかった。いいよ。」

エスク・フィランスはロックマンを見る。

「その前に電波変換を解いて。ここなら大丈夫だよ。」

「うん。」

スバルは電波変換を解除した。アリアスも。

（可愛い……）

スバルはアリアスに見惚れていた。

（くくっ。これをミソラに言ったらどうなるかな？）

ウォーロックは笑っていた。

「言う前に1つ。これからは私をアリアスじゃなくて【ヒカリ】って呼んでくれない？」

「なんで？」

「私は【ヒカリ・アリアス】って言うの。アメロッパ人と日本人のハーフだよ。」

「だから、蒼い瞳なんだ。」

簡単にアリアス（これからはヒカリと書きます。）の容姿を説明します。

蒼い瞳に藍色の髪、身長はミソラと同じくらいでショートカット。

スタイルならミソラ並かそれ以上だ（因みに十二歳でスバル等と同い年。）

「わかったよ。ヒカリちゃん。」

「ちゃんはダメ！！ヒカリって呼んで！！」

補足。わがままもミソラ並。

「うん。わかったよ。ヒカリ。で、お願いって何？」

ヒカリは、いくぞ！！と深呼吸した。そして……

「初めて見たときから好きでした！！付き合ってください！！」

……言っちゃった。

戦いの後に（前書き）

最終回じゃありませんよ！！

ただのネタ切れです！！

戦いの後に

「初めて見たときから好きでした。付き合ってください！！」

――ぴーっ――――

～スバルの脳内～
（音声のみでお楽しみください。）

―エマージェンシー！！エマージェンシー！―

―星河スバルの神経に異常発生！！スバルバスターズはただちに出動せよ！！―

「「ラジャー！！」」

スバル１
「くっ！アレが原因か！」

スバル２
「隊長！あんな巨大なハート型の生物は見たことありません！！」

スバル１
「くそっ！！怯むな打てーっ」

スバル２～１２
「うおおおお！」

ハート型の生物
「うぎゃあああ」

スバル１
「よし、ミッションコンプリートだ！これで神経も正常化するだろう」

～戻って現実～

―好きでした、付き合ってください―

スバルの頭の中は先程のヒカリの言葉が渦巻いていた。

「えっえええええ！？」

「お願いします！付き合ってください！」

「ち、ちょっと、落ち着いて！それに僕には彼女いるから無理です！！」

ピタッ

「本当に？」

「うん。」

「ううっ……グスッ……ふえええん！！」

泣き出したヒカリ。

「さて、逃げるか。」

「「「了解。」」」

ファイ等４人は逃げていった。

「ご、ごめん。」

「好きなのにぃ～～」

また泣きだした。

「落ち着いた？」

「取り乱しちゃってごめんなさい……グスッ」

「な、泣かないでよ。仕方ないでしょ。」

（いつになったら俺の出番が……）

（なんか最近私が忘れられてる気が……）

「じゃあ1つ言うこと聞いて？」

「わかった。」

何を言われるか分からなかったが、とりあえず了承。

「私も地球に戻りたいから私の住む場所を探すの手伝って。」

「うん！それなら協力するよ。まずは地球に戻ろうか。行くよウォーロック。」

「ありがとう！！さ、エスクも準備して！！」

（（忘れられてなかった！スバル（アリアス）ありがとう！！））

何故か心に希望が満ちたウォーロックとエスクだったという。

―トランスコード・シューティングスター・ロックマン――

―電波変換アリアス、オン・エア―

2人は地球に戻った。

～コスモウェーブ最奥部～

「ふっ……まずは1つ目か……次は？」

巨大な電波体が話す。

「エルがいきます。」

「なるほど。楽しみにしているぞ。」

「了解しました。マスター。」

ルアが巨大だ電波体と話をしていた～～

勃発！ミソラＶＳヒカリ１（前書き）

次に間章を入れます。

勃発！ミソラVSヒカリ1

―展望台―

「ついたね。」

「うん。」

2人は電波変換を解除してスピカモールに向かった。理由は簡単。ヒカリの家を探すためだ。

しかし、問題発生。

「だめだよ。いくら世界のヒーローだからって家を探して下さいなんて。」

2人共、小学六年生。つまり十二歳。
ここで1つの方程式が完成した。

―――――――――――――

小学六年生＋家を探す＝不可能

――――――――――――

「「どうしよう。」」

2人揃ってため息をつく。

「ねぇ、スバル君。諦めなくていい？」

唐突にヒカリが聞く。

「何を。」

「スバル君が好きだって事だよ。本気で好きだから諦めたくない。だから、諦めなくていいよね？」

こんな事を言われたら困るスバルな訳で、

「…いいよ。少し無理があると思うけど、君も僕の友達だよ。」

と答える。

「ありがとう。これはお礼だよ。」

チュッ

「！！！！！」

ヒカリがしたのは頬に触れる優しいキス。

「……」

スバルはカチンコチンに凍り付くのが関の山。今にも崩れ落ちそうです。

更に最悪な事にまさかまさかのあの人が登場。

「あっれー？スバル君。何を女の子とイチャイチャしてるのかしら？」

スバルの天使兼、彼女兼悪魔のプリティーアイドル……

ミソラが現れた。

間章～スバルの居ない日～（前書き）

ミソラ視点でお送りします。

間章〜スバルの居ない日〜

スバル君が戦いに行ってから数分。私はオクダマスタジオにて仕事をしてます。

〜スバルのいない日〜〜開始〜

《ここはミソラ視点でお送りします》

「うーん。ミソラちゃん。具合悪かったら無理しなくていいのよ？」

専属のヘアスタイリストのウィザードさんが笑って言う。

「大丈夫だよ。」

決まって私は答える。今を頑張ればスバル君に褒めてもらえるから。

スバル君に告白して、彼女になれてスッゴく幸せ。

「ミソラ。にやけてないでさっさと仕事よ！！」

えっ！？私にやけてた？

ううっ……恥ずかしい。

「……よしっ！お疲れ様。今日は上がっていいから疲れをしっかりとってね。」

しばらくして、仕事が終わった。

さぁて、今日はスバル君の家でお迎えしなきゃ！！

～ってな訳でスバル宅～

「お邪魔します。」

「あら、いらっしゃい。ミソラちゃん。」

そういえば茜さんにもすっかりお世話になったな。ふふっ、私達の事を話したらどうなるんだろ（↑めっちゃ危険です）

「……へぇ、スバルと付き合ってるんだ。」

ありゃ？普通の反応だ。

「は、はい！」

「よろしくね。ミソラちゃん。」

「はぃぃ……」

何だろう？すごく恥ずかしい。

「ねぇ、ミソラちゃん。もし良かったら家に住まない？」

へ？

「私は嬉しいですけど、迷惑じゃありませんか？」

「あら、息子の彼女が家に住むなんて、私の夢だったの。大歓迎よ。」

「はい！！お世話になります。」

ピリリリリ

「あら？スバルからメールって懐かしいわねえっと……《さっき知り合った女の子が、家に泊まりたいって言ってるんだけど、だめかな？》……」

……スバル君……

浮気はいけないなぁ。

「《展望台にいるから、良かったらメールして》だって。どうする？ミソラちゃ……あら？居ない……ふふっ。スバルも大変ね。」

茜さんは私の行動に気付いて笑っていたらしい（ハープ談）

……さて、スバル君に愛のお仕置きをしますか。

スバル君、覚悟しといてね。今行くから……ふふっ。

（後日談

「あの時のミソラは阿修羅に見えました。」ｂｙハープ）

勃発！ミソラVSヒカリ2～あっけない決着～

「……なるほど、そういう訳なら許してあげる。」

スバルは、ヒカリの事を全て説明し、なんとか許してもらった。だが……

「今晩は、私と同じベッドで【密着】して寝てね。」

という酷い目に会うことになった。

（2人に告白されてから、余計に気にしちゃうな……僕にはどちらも選べないって。確かにミソラちゃんはすきだけど。そしたらヒカリが可哀想だよ。）

内心悩むスバルだった。

「「うふふふふっ」」

2人はお互いに探りを入れていたが、しっかり打ち解けていた。

そしてなぜかミソラちゃんとヒカリが同時にスバルの布団で、スバ

ルと一緒に寝るらしい。

え？スバルはって？うん、少し絶句した後に今度は絶叫してた。

そして、問題の夕食後。

「「スバルくーん」」

2人がスバルに体を密着させます。スバルは気絶しかけていたが。
それすらできなかった。

ここで、一つのニュースが流れてきた。

《ここで、ニュース速報をお送り致しします。本日、国会議事堂で行われた会議で、『少子化対策本部』と、『法律管理局』が、少子化対策として、【一夫多妻法】を作る事になりました。これを受け、総理大臣は
「少子化対策としてなら了承致します」との事です》

……

「嘘でしょ？」

刹那、2人の目が光る。

「「ス・バ・ル・く・ん・？」」

「な、ななに？」

「「絶対私達と結婚しようね？」」

（やっぱりこうなった。）

スバル的には内心嬉しかったらしい。スバル曰く、
「どちらかを選んでもう一方をきづつけたくない」
らしい。

「まだ分からないけどね。」

笑ってスバルが言った。

「大丈夫だよ。」

「私達はスバル君の物だし、」

「「何よりスバル君は私達の物だからね。」」

スバルはその言葉に悪寒を覚えたらしい。

そして、夜になっていく……

夜と朝（前書き）

このタイトルは変更する予定です。スルーしてください。

一夫多妻法とか……やりすぎたかなぁ？

夜と朝

〜時は変わり夜〜

「僕ってとことこん運がない」

スバルは両腕にくっついて眠るミソラとヒカリを見てため息をついた。

「「すー……すー……」」

（僕は一体どうなっちゃうんだろう？）

スバルの苦悩の毎日が幕を開けるのであった。

～その頃のスカイウェーブ～

「ふふっ。《私（エル）との勝負は知恵比べ。私の出すお題を全てクリアーできればあなたの勝利です。》……っと。送信！」

何故かエルがスバルにメールを送っていた。

～翌朝～

「ん？メールだ。」

スバルはエルからのメールを見た。

（何故顔写真が付いてきてるの？）

しかもプロフィール付き。

（プロフィールとかいらなくない？）

激しく同意します。

プロフィールによると……

――――――――――――エル

年齢……秘密

スリーサイズ……秘密

体重……秘密

主の名前……秘密

好きなもの…甘いお菓子

嫌いなもの…虫
得意なこと…秘密
――――――――――――
「秘密だけだね。」
「ああ。」
「女の子？」
「そうだよ。女の子で同い年でスバル君ＬＯＶＥな上に、かなり美人……大和撫子みたいな人だよ。因みにエル・マーレイドって言うのが電波変換した名前で、本名が綾瀬セツナって言うんだ。頭が良いんだよ。」
「ううっ、スバル君のお嫁さんが１人増えた（泣」
「だからお題をクリアーしてって言ったのか。」
馬鹿を言うミソラを無視してスバルが頷いた。
《第一のお題【１＋１は？】因みにどんどん難しくなるからね。１人で解きなさい。》

「……《２》送信」

静まり返るスバルの部屋。

「《せいかーい第二のお題は【３Ｘ＝（－８）×６】は？》」

「「「「難しい……」」」」

「《１６》送信！」

頭を抱えて悩む２人と３体を無視してスバルは返信した。

「《正解だよ。次からは謎解きをしながら私の居る場所に来てもらうよ。》」

スバルに対するエルからの試練はここからだった。

第二の試練！！エルとの知恵比べ（前書き）

つまらないと思いますが……

第二の試練！！エルとの知恵比べ

「《第一問【存在しない七つ目の一番高い場所】……頑張ってね～》」

分かりましたか？

そうです。あそこです。

「学校の屋上。ここだよね？多分。」

そうです。学校の屋上です。七つ目とは七不思議の七つ目の事です。
それが存在しない場所。つまり学校。
そして、学校の一番高い場所。屋上に決定です。

ピリリリリ！

「《正解だよ。次は【世界一高い町の太陽の前】》だから。頑張って！！」

（世界一高い町……あ！！スカイタウン！……でも太陽の前？うーん）

スバルは取り敢えずスカイタウンに向かった。

ミソラとヒカリは自宅待機です。

～スカイタウン～

「うーん、来たのはいいけど太陽の前……太陽……太陽……あ！あった！」

目に映ったのは階段を上った先にある天気を晴れにする太陽の置物だった。（最近ロックマンエグゼ６始めたんで、使ってみました。）

ピリリリリ！！

《お見事！次は【人が最後に向かう場所の頂上】だよ。頑張ってね。私はそこにいるから！！》

「人が最後に向かう場所……まさか！！」

スバルは電波変換して、走りだした。……ある場所に向かって……

……

「……気付いたかな？さぁ待ってるから早く来てね。私の王子様……」

「セツナったら……全くもう……アリアスに似てスバル君ＬＯＶＥねぇ……。」

顔を真っ赤にしてうふふと笑うセツナを見てエルが微笑んだ。

エル・マーレイドのお願い（前書き）

すみません。更新出来ませんでした。でも、これからは、できるだけ更新したいです。

呟き―　　エル・マーレイド編がこれで終わりって……虚しい……

エル・マーレイドのお願い

〜天空の大階段〜

過去にムー大陸に繋がっていた場所にスバルはたどり着いた。

「来たね。」

「うん。けど、まさかここだったなんてね。」

「《天国》と掛けてみたんだよ。さすが流星君。」

「流星君じゃないよ。今はロックマンだ。」

「そう。じゃ、ロックマンで。けど、ここまでだよ。私の王・子・様。」

「はい？」

「このままじゃ分からないかな？はい。」

エル・マーレイドはかぶっていたマントを取った。

「……スバル？」

「……何だろう？……不思議な感じがする。」

そういうスバルの目はしっかりとエル・マーレイドを見ていた。

エル・マーレイドは灰色の髪に金色の瞳そしてバランスの取れた体つき。完璧そのものだった。

「よくここまで来ました。これはご褒美だよ。」

チュッ

「！！！？？？」

頬に唇が触れた事を知り、スバルの顔は爆発した。

「じゃ、次の問題！！今から３つの課題を出します。それをクリアーしたら、私の負け。できなかったら、私の奴隷だからね。」

「ど、奴隷！？ダメだよ。そんなの！！」

「じゃ、唇にキス。」

「わかった。お題は？」

「私の為にお菓子作って。２つ目が私とデートで、３つ目が私とけっ
「言わせないよ？それにキミが言ってるのは願望だよ。」

「ばれた？」

「いや、ばれるよ、普通はね。」

「むぅ。だって、最初に言った３つのお題もクリアーされたから、
私の負けだもん。少しくらい付き合ってくれたっていいよね？」

と、涙目で迫って来る。

「だ、だめだよ。僕には彼女が二人もいるし……」

「ヒカリちゃんとミソラちゃんでしょ？ヒカリちゃんから聞いてる

よ。」

「あ、そう。」

「だから、私も彼女にして欲しい。」

なんと身勝手な。

しかし、断れないのがスバルの性格な訳で……

「2人に相談したらね。」

……と、言ってしまった。

「やった！！じゃあ早くスバル君の家に行こ！！」

エル・マーレイドに腕を引かれて、ロックマンはスカイウェーブを後にした。

～コスモウェーブ～

「はぁ、あと2人。そして俺か。」

ルアが呟いた。

「くく……次は俺がいくぜぇ。ルア。」

「アルが？いいだろう。任せたぞ。」

「ああ。じゃ、取り敢えず戻っておくぜ。」

ルアは姿をけした。

「アルは強いぞ。気を付けろよ。ロックマン。」

地球を見てルアが言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9686h/

流星のロックマン《二百年後の訪問者》

2010年10月11日11時27分発行